みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

市民道徳としての「健康」 (私のスケッチ・ブック (14))

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2016-03-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 森, 明子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00005897

私のスケッチ・ブック(14)

市民道徳としての「健康」

国立民族学博物館 助教授
森　明子

■新鮮な空気の「健康」

日本の夏に、冷房は必需品となった。電車やオフィスは密閉状態である。窓は開けない。そこで「窓を開ける」ことについて考えてみたい。

窓を開けて風を入れる。新鮮な空気を入れるためである。では、なぜ新鮮な空気を入れる必要があるのか？「新鮮な空気が心地よい」からである。「空気の入れ替えをするため」という答もあるだろう。後者は「健康」や「衛生」に結びつく。しかし、私にとってこの二つの答は矛盾しない。空気を入れ替えることは、気持がよいことだと思っているからだ。もし、気持がよくなければ、私は窓を開けようとはしないだろう。

しかし、よく考えてみれば、「気持よい」ことと、「空気の入れ替えをする」こととは、別のことである。

「気持よい」というのは、快適で心地よいということを意味する。ドイツ語ではangenehm（アンゲネーム）がぴったりである。しかし、ドイツ人が窓を開けるとき、この言葉を使うことはない。この状況にふさわしい言葉は、frisch（フリッシュ）（新鮮）か、gesund（ゲズント）（健康）である。新鮮な空気を入れることは健康であり、だから必要でよいことなのである。

■散歩の「健康」

もう一つ例をあげよう。私は、海外でも数日カンヅメになることがある。外出したほうがたしかに健康ではあるが、集中して仕事をすることは、私にとって健康にもまして重要な意味をもっている。多少運動不足になったところで、そんなものはすぐにとりかえせるし、仕事が終わってから1日や2日を寝床ですごすことになっても、それはそれで悪くない。

しかし、このような生活態度は、ドイツ人には好ましくなかったようだ。私はそれほどにも考えていなかったが、さまざまな機会に、誰もが同じようなことを私にいった。今になって考えると、彼らは本気で私の行動に意見をしていたのだと理解できる。

私は散歩が嫌いではない。しかし、私

にとっての散歩は、したいと思うときに楽しんでするものである。そのような散歩は、私にとって「快適で心地よい」ものである。しかし、彼らは厳寒の冬にも散歩する。彼らが散歩に求めていることは、「快適で心地よい」ことばかりではなく、まず「健康」であることなのだ。

ここで問題にしたいのは、ドイツ人と日本人の「健康」という言葉の内包する意味の違いである。ドイツ人のそれは、健康管理という責任と結びついている。そしてそれは、じつは快楽とは縁の遠い言葉なのである。

■商品としての「健康」

ふりかえってみれば、「健康」という言葉は、この10年ほどで急に日本であふれるように増えた。健康食品、健康グッズ、フィットネスクラブまで、さまざまな商品が出まわる。中高年の登山が急増し、朝夕の住宅街には、スポーツウエアに身を固め、両手をふりあげて歩く人の姿が必ずある。

「健康」という言葉は日常会話にも頻繁に登場し、とくに60歳代前後の人と話をすれば、この語が出ないことのほうがめずらしいだろう。

しかし以前には、「健康」という言葉は、それほど日常的なものではなかった。学校や保健所で聞くほかは、それほど使われなかったと思う。親が子供の健康に気をくばることはあっても、健康は、およそ病気や医者という語の陰画としてあって、実際の関心の対象は、病気の除去にあったと思う。私たちは、それほど「健康であること」に関心があったわけ

ではない。

現在の「健康ブーム」では、「健康」が商品として売買されている。「健康」が商品価値をもつようになったことは、そのような消費者の関心が起こっていることを意味している。ただし私たちが、健康をどのようなものとしてとらえているのかについては、あらためて考える余地がある。

私たちにとって「健康」は、消費される商品であって、厳密にいえば、私たちはそれを買うことに「快楽」を見出している、というほうがあたっているのではないだろうか。高級デパートの健康食品売場、「自然志向」という語の流行の最先端をいく響き、スマートでカラフルなスポーツウエア、フィットネスクラブという階級意識をくすぐるブランド、そして通信販売の楽しみなどなど。

念のために断っておくと、私は、それを批判する気持ちは毛頭なくて、むしろ自らも楽しんでいるほうだ。しかし、日本人の健康への関心と、私がドイツ人と長年つきあっていくうちに、彼らの生活態度の深いところに潜んでいるのを見出した健康の意識に、明らかな違いがあるのは確かなようだ。そのことを考えてみ

たいのである。

■社会的な義務としての「健康」

ドイツ人の「健康」は、自ら管理すべき責任という考え方と密接に関わっていて、それは１人の社会人にとって、義務として意識されないほど、基本的なつとめである。

個人は、健康を自ら管理する責任を負っている。なぜ健康であることが個人の責任とみなされるかといえば、それが社会に貢献することの前提になるからである。

社会の構成員に、このような貢献を最初に要求したのは、19世紀までに成立した「近代」であった。それは、フーコーが「生―権力」と名づけたように、軍隊や学校をとおして、あるいは人口統計学を通して、国民の身体を行政管理し、生を経営しようとするものであった。

明治の日本は、ヨーロッパにならってこのような諸制度を導入したが、それを１人１人の日本人が内面化したか、となると疑問がある。

ヨーロッパで際だっていることは、このような権力の側の要請を、社会を構成する各個人が、それぞれの価値観として体内化していることである。ヨーロッパの近代市民社会は、この価値観をいただく市民から構成される社会であり、その価値意識は、今日にいたっても個人の意識の深いところに潜んでいるのである。

■レスペクタビリティ

この価値観を19世紀のイギリスで、レスペクタビリティrespectability（尊敬されるに値すること）と表現した。レスペクタビリティは、作法、道徳、性的態度など、すべての領域での行動様式を支配していて、内在的に人間の性的情熱を制御することを要請している。そのような抑制ができる人間が、他人から尊敬されるのであり、市民とは、そのような抑制ができることによって、他人から尊敬される人とされた。ここでは、快楽を追求するのではなく、その欲望を抑制することこそ尊敬されたのである。

モッセによれば、中産階級を特徴づけるのは、経済生活だけでなく、このレスペクタビリティの理想にもとづいた生活様式である。つまり「彼らは、倹約、義務への献身、そして情熱の抑制に基づいた自らの生活様式が、怠惰な下層階級や放蕩な貴族の生活様式よりも優れていると考えた」と述べている。

やがて、19世紀を通じてこの生活様式は社会に定着していき、最終的には、安定した秩序あるすべての社会のものとなっていったのである。

■「衛生」の成立

ほぼ並行して、衛生ということばが、社会の中で新しい位置を占めるようにな

ったことに注目したい。衛生は、英語でもドイツ語でもフランス語でもほぼ等しく、ギリシア語のヒュギエノスに由来する。従来、この語は健康な状態でいることを意味したが、19世紀以降、健康状態を維持することに役立つ装置と知識を、集大成することばになった。

その知識の体系が、国家や都市など、上からの権力と不可分に結びついていたことに、注意する必要があるだろう。

19世紀、ヨーロッパの国々が、中産階級市民を中心にした近代国家をつくりあげていく過程で、社会の構成員は、快楽や情熱を自ら抑制する道徳（レスペクタビリティ）を体内化し、同時に上からは、衛生という体系が社会を覆っていった。

具体的に例をあげると、ドイツの大都市では、この時期に街灯が設置され、清掃制度が整えられ、上下水道や運河の整備、貧民窟の撤去と労働者住宅の建設が進められていった。それは、明らかに警察権力を伴う上からの改革であった。

「衛生」と「健康」が、ほぼ自動的に国家の必要を意味するようになったのがこの頃であると、ドイツの民族学者カシューバは指摘している。この過程を経て、中産市民階級の価値観であった清潔が、「ドイツの清潔」という精神的、神話的な色調を帯びた、国家の価値観へ昇華していったという。

■「健康」の意味

19世紀の科学観は、悪徳／美徳を、健康／病気の問題にした、とモッセは述べている。そこでは「病気は自然に対する罪悪の結果」であった。先述の私の生活態度は、100年前であれば、もっと厳しい叱責をかったであろう。

ドイツの「健康」は、このような社会の脈絡の中に位置付けられている。そして、健康のための装置として、学校における教育、とりわけ体育があり、また、健康にきわめて近い概念として、洗濯や入浴、清掃に関わる「清潔」があった。

現代のドイツ人の健康や清潔の意識が、すべからく、このような国民国家建設当時の、国民主義のイデオロギーに裏打ちされているというつもりはない。しかし、ドイツ人の健康の意識は、「市民の責任」意識に裏打ちされた、倫理的な価値意識と深いところで共鳴することも、また事実である。

□参考文献

1) ミシェル・フーコー『性の歴史Ⅰ　知への意思』新潮社、1986
2) ジョージ・L・モッセ『ナショナリズムとセクシュアリティ』柏書房、1996
3) Wolfgang Kaschuba >Deutsche Sauberkeit< －Zivilisierung der Körper und der Köpfe, in Georges Vigarello, Wasser und Seife, Puder und Parfüm：Geschichte der Körperhygiene seit dem Mittelalter, Campus Verlag, Frankfurt, 1988：292-326.